

令和4年度 第3回インクルーシブ教育（支援児包容教育）推進委員会 議事録

□開催日時：令和5年3月3日（金）14時00分～16時15分

□開催場所：産業文化センター3階 大会議室

□出席者（敬称略）

・委員：宇野宏幸・中野正大・柴田勇夫・西尾実・保義博・長谷川義弘
岡英樹・成瀬輝正・長谷川邦代・吉田香奈子

・事務局：渡辺教育長・高橋副教育長・林教育次長・吉川教育相談室課長代理
立間教育相談室指導主事・皆川子ども支援課総括主査・尾辻保健センター主任
長谷川子ども支援課障害児巡回支援専門員

・基本施策2 中学校通級指導教室 報告者：北陵中 後藤 教諭

1 あいさつ
教育長あいさつ

2 報告

【第1部 今年度の取組 基本施策1・2・3・4・5・6の内容について報告】 … 事務局より
委員A：基本施策が柱に沿って着実に展開されていると実感できた。中でも、GIGAスクールとの関連で、ニーズのある子へのICT機器を活用した支援、児童生徒がどのようにICT機器を活用するかという点に期待。一方、教員が授業のどんな場面でどんなねらいでいかにデジタル機器を使いこなすかということが今後の課題。また、中学校通級が始まった通級指導の充実・拡充、医療的ケアの充実、特別支援教育の専門性の向上も着実に進展している。

本委員会も10年の区切りを迎え、全国的にもインクルーシブ教育に向けて機運が高まっているが、一方で、障害者の権利条約に係る国連の勧告など、大きな課題もある。インクルーシブと言いながら、特別支援学級が増え、特別支援学校の児童生徒が増えている現状を指摘されることもあるが、これは、保護者や本人の意識が高まり、より充実した支援の受けられる場所を選択するようになったということが大きい。しかし、一方で、通常学級で手厚い支援がなかなか受けられないために、より充実した支援を受けられる支援学級、支援学校を希望するということもある。インクルーシブ教育は、通常学級でみんなが学ぶ、それぞれの子どもの学びが得られることをめざすところ。今後も、よりよいインクルーシブ教育のあり方をこの委員会で検討していきたい。

委員長：本校の生徒も1名、中学校通級を利用している。大変に安心して生活している。充実した支援を受けられる体制を拡充していくことはとてもありがたい。また、基本施策3の通常学級での支援のあり方について、社会のニーズや世の中の状況に合わせて、教員がより理解を深め、専門性を高めていきたい。

【第2部 重点項目について報告】

① 基本施策5 一貫した支援の取組 … 「高等学校における通級による指導について」

東濃フロンティア高等学校 角田 宏征 教諭（VTR）より

② よりよい中学校通級教室のためのアンケート報告 …

事務局より

③ 基本施策2 連続性のある多様で柔軟な学びの場の整備 … 「中学校通級指導教室について」

中学校通級指導教室担当 後藤 正樹 教諭（北陵中）より

委員B：素晴らしい内容であったが、少し心配な点もあった。一つは、「中学生になったら言葉のやりとりで学習できる」という内容があったが、現実には、中学生になっても言葉のやりとりだけでは難しい子がたくさんいる。そういう子どもたちにどういった対応をしたらよいか、大きな問題。発達障害の子

は環境や周りの支援が大切だが、発達の仕方がゆっくりなため、漏れてくる子がいることを知っておき、言葉だけでなく、視覚的・体験的にその子その子に合った対応を考えることが大切。

また、成果として「自己理解が深まって実際の行動に移すことができるようになった」とあるが、ADHDだけの子は自己理解ができるようになるが、自閉の子は難しい。個人差も大きいため、その子にあった形で自己理解を深めるような支援が必要。中学生では、的確に自分を説明したり、自分の気持ちを言葉で表現したりできない、伝えられない子もたくさんいる。

高校の通級でやってほしいこと。万引きや不法侵入などの犯罪に結びつくような行動をしてしまう子もいる。彼らは自分の行動が犯罪か、悪いことかどうかの判断ができないこともある。通級の中で社会のルールをわかりやすく教える必要がある。小中学校の時点で繰り返し支援をすることも大切。

(授業での)チェック表でチェックはできるが、実際の社会生活の中では、知っているが実践できないという事実を知ってあげることが大切。また、「何か困ってないか」というような漠然とした質問ではなく、個別的に一つ一つ具体的に聞かないと、困っていることが答えられないこともある。それを念頭におきながら通級指導をしてほしい。すばらしい内容もたくさんあったので、今後も継続してほしい。

委員C：就労継続支援施設では、学校卒業後、障害のある人も仕事をしながら社会人として成長していくことを支援している。したがって、長いスパンで支援の良し悪しを考え、一年二年で成果が出ることは考えていない。18歳から60歳になっていく中で、社会人としての自立をめざすという考え方である。あまり性急に、1年ごとの成果を目指さなくてもよいのではないか。方向性を示せばよい。

3 意見交流

【第3部 次年度(第6期)の多治見市のインクルーシブ教育について】

委員長：発達障害のある児童生徒の増加傾向を受けて、通常学級に関わる教員の理解を充実させることが必要。

委員D：通常学級担任の教員の専門性について、必要感を感じていない先生にどれだけ理解を促しても吸収、改善されないが、支援に困っている先生は、よく実践する。一律に研修をするより、困っている教員に働きかけるのがよい。市で行っている巡回相談も、就学等支援委員会を目的としたもの以外に、加配教頭や指導教諭がチームを組んで困っている学校に訪問する機会を増やすとよい。困っている先生にノウハウを伝えることで、広がっていくのではないか。

委員F：先生たちを見ていると、強い思いや願いで子どもに接しているが、うまく支援できていない場合もある。それぞれの先生の思いをよく聞いて、対応を考えたい。

委員G：教務主任の立場から。教職員の専門性の向上を図る研修という観点から、各学校で特別支援教育に係る研修も実施すべき。特別支援教育コーディネーター研修の内容も、なかなか校内には伝わらない。教員もそれぞれに勉強はしており、子どもの状態を見て理解できても、その対応については不十分である。学校では、まだまだ画一的な価値観で運営されていることの多い社会から求められる力、そこに対応できる子を育てるために、かなり性急に画一的な行動を求めることがある。発達が遅かったりわかっていてもできなかったりする子もいるので、できないことも認めながら、周囲ができないことを支えていく、できないことに対し助けを求めることができる社会を創る、そういったことも含めて、各学校で研修を位置づけていきたい。

委員長：学級経営のあり方に対する教員の意識改革を図り、発達障害の子に限らず違いを受け止めるという視点を啓発していかねばならない。

委員H：幼保では、毎日保護者と接することができるが、最近の傾向として、保護者の困り感の継続がある。生まれたすぐから育てにくさを抱え、子育てで不安があり、うつになってしまったりする。子どもの育ちにくさに対して、幼保では保護者支援が課題になっている。学びの場の決定の際に、幼保の教員は集団の中でよいモデルを見ながら育つことがよいと思っても、保護者の不安が大きく、より手厚い支援を期待し、特別支援学級や通級を希望する方が多い。子どもの成長より、母親が自らの心の安定感を求める傾向にある。その不安に対し、スマイルブックや支援シートの引継を丁寧に行うことで

対応しようとしている。保護者の不安をなくす支援をしていきたい。

委員E：(現在勤務している) 特別支援学校で、児童生徒がお互いのことをよく知らない関係を何とかしたい、感謝し合える関係性を作りたいと考え、役割を果たし「ありがとう」と言ってもらえる機会を作ろうとしている。それは、次の活動への意欲にもつながる。「校内での困りごとを助けてください」という教頭先生からのお願いという形で、例えば、砂利の駐車場の穴埋め作業、コピー用紙の折り直し、畑の耕しなどを呼びかけた。困っていた人からの「ありがとう」の言葉で、作業をしてくれた子どもの目の輝きが生まれてきた。今後、それを教科(生活単元・自立活動)にもつなげたい。お互いのつながりをもつことで、必然性をもちながら自然な形で人の役に立つ、人との関係性を作ることが大切。コミュニケーションや自己理解は大切だが、人の気持ちを理解しなさいと言っても難しいことなので、他者の感情に触れるような機会を増やすことが大切。そのために、優劣のつかない、単純にいいな、すごいなと思えるような活動(陶芸など)、お互いが認められるような活動を増やしていきたいと考えている。

委員I：障害児を育てている親の立場から。教員の専門性の向上にずっと取り組んでもらっているが、障害児を育てている親でも、自分の子どものすべてを把握できているわけではない。それぞれに違う特性があり、先生がそれを見極め、最適な支援をすることはとても難しいこと。子どもが学校で見せる姿と家の姿には違いがあり、今までたくさんの先生に関わってもらってきたが、子どもの情報を先生と共有することで、意見を出し合ったりお願いをしたり協力を求められたりすることが大切。障害に対する専門性があればよいというだけではない。テレビのドラマやドキュメンタリーで障害を取り上げた番組があるが、当事者ではない様々な人も関心をもって見ている。先生だけに専門性を求めて押し付けるのではなく、周りの人が子どもにとってよい環境になるように考えていくことが大切。現在は、学びの場の選択肢がたくさんあるが、保護者が最適な場所を見つけるのは難しいので、先生と一緒に考えていけたらよい。

委員A：皆さんの意見を聞いてのまとめ。多治見市のインクルーシブ教育推進委員会の10年目の節目であり、今後の10年、20年を考えたい。それは原点に帰るということ。中学校、高等学校の通級指導教室がここまで進展してきたが、なぜ、通級指導をやっているのかをもう一度考えたい。わが国で、インクルーシブ教育の推進、そのシステムの構築にあたって文部科学省が考えたことは、やや消極的だが、障害のある子がメインの教育から排除されない、通常学級の教育課程に参加できるということであり、そのために、通級指導教室で、本来の教育課程をサポートする、その子のニーズ、つまり通常学級での学びにくさがあったら、それを通級指導教室でなんとかしよう、個々の子どもの困っていることやニーズを踏まえて、通級で指導支援しようということである。

これまでの特別支援教育は、社会のあり方に合わせて、そこで自立するために指導しなくてはいけないと言われてきた。しかし、これからの教育では、いかにその子の可能性を引き出してあげるかということが大切。学ぶポテンシャル、発達障害の子は潜在的にいろいろもっているが、今の学校教育、通常学級の中では発揮しにくい、それをなんとかしようというのが原点である。これから通級指導教室にお願いしたいのは、それぞれの子の自分なりのやり方、解決の仕方を身に付けるような場を提供してほしいということ。周囲の人々の寛容さも必要。周囲へ理解を促し啓発する。「みんな違ってみんないい」というのは簡単なことではないが、これからは、みんなが違うという前提で、それぞれの学び方があり学ぶ目標も違うというようになるとよい。自分なりのやり方が認められ、こういう人たちがいるということの理解、普及、啓発をどんどん行う。それにより、社会に寛容さが生まれ、社会的なインクルーシブにつながる。

皆さんにアピールしたい。最重要な理念は何かということ、広く共有したい。それは、一言でいうと、それぞれの子どもの違いを生かすということ。「みんな違って、みんないい」をより積極的にとらえる。子どものもっている持ち味を発揮できるような学校・社会になっていくとよい。文部科学省が「令和の日本型学校教育」の二本柱として「個別最適な学び」「協働的な学び」を掲げているが、この「個別最適な学び」には「指導の個別化」と「学びの個性化」があり、これは二つとも、障害のある子にとって、これまでやってきた個別の指導計画とつながる。

特別な子だけでなく、すべての子どもの特別支援教育が実現すると、インクルーシブ教育になる。みんなが違っていることを前提に、それぞれの子どもの学びを創っていくことが一番大切ということをご提案したい。そのためには、学校の教員の意識（マインドセット）を変えることが必要。違いを生かす、持ち味を發揮する教育に意識を転換する。それにより、研修の内容や特別支援教育コーディネーターの役割や活動内容がはっきりしてくる。

委員C：就労継続支援施設「けやき」は、知的障害者の施設として名前はずいぶん知られてきたが、その子たちが、どんなことに悩み、どんな困りごとがあり、将来どうするかということまで知っている人はほとんどなく、差別や偏見はだいぶ少なくなってきたが、まだまだ理解をしてもらっているという状況ではない。今の社会も、障害者、普通の人とは異質な者に対する拒否感はずいぶんある。共生社会と言うが、障害のある人が障害のない人と共生できる社会とは言えない。インクルーシブ教育は重要だと思うが、そういった教育をしているということを、障害のない人に知ってもらうことが大切。

4 あいさつ

副教育長あいさつ